

サンド小説『モープラ』における「家」と「結婚」

稲田 啓子

はじめに

『モープラ』(1837 年) がジョルジュ・サンドの「結婚小説」の代表例として挙げられることは少なくない。たとえば『アンディアナ』(1832 年) から『ドルシユタット伯爵夫人』(1844 年) までのサンド作品における結婚の問題を精緻に分析したアルレット・ミシェルは、『モープラ』をサンド小説の分岐点であるとし、「『モープラ』以降の「結婚小説」——より正確に言うならば、小説の中で結婚が大きな役割を示している作品群——は、主人公たちが結婚へ、いわば完全な状態へと辿り着く人生修行の小説のようなものである」⁽¹⁾と述べている。事実、処女作『アンディアナ』(1832 年) 以来、政略結婚による不幸と夫権への反抗——『モープラ』に寄せた「著者の言葉」においてサンド自身、この小説の執筆当事まで、自分は「結婚制度の持つ悪習と闘ってきた」⁽²⁾と明言している——を一貫して描き続けた作者は、『モープラ』において初めて、障害の多い主人公の恋愛を結婚という形で成就させている。

確かに、『モープラ』を一読すれば、主人公が紆余曲折を経て女主人公の心をつかみ、最後には家族や仲間から祝福を受けて結婚するという幸福な結末こそが、まず読み手の目を引くだろう。だがその一方で、『モープラ』では、主人公の「結婚」をめぐる生じる家名や財産、持参金、世間体といった、極めて世俗的な「家(共通の先祖から引き継がれてきた血縁集団の結合体)」の諸問題が、その他のサンド作品と比べて実に詳らかに描かれている。つまり『モープラ』は、タイトルの示すとおり、フランス革命前の地方の一貴族「モープラ家」の物語でもあるのだ。

したがって本論では、主人公の劇的な恋愛の裏でこれまで等閑視されてきた「家」

を主軸に『モーブラ』を読み解いていく。「モーブラ家」の特徴に触れながら、主人公ベルナルと女主人公エドメの結婚を阻むものを「家」という観点を通して考察し、最終的に『モーブラ』における「家」と「結婚」の関係、結婚が「家」と当人たちにもたらすものを明らかにすることによって、『モーブラ』の新しい側面を見出したい。

1. 「モーブラ家」の構造

80歳を過ぎた主人公ベルナル・モーブラが、小説の著者である青年作家に自分史を語るという手法をとった『モーブラ』は、小説における「家」の重要性を予告するかのように、その冒頭の大半をモーブラ一族の家系の説明に注いでいる。モーブラの「家」の全容を明らかにするのは、ベルナルが青年作家に語り始める次の一節である。

モーブラ家には本家と分家がありました。わたしは本家の人間です。わたしの祖父はトリスタン・ド・モーブラ。財産を食い潰し、家名を辱め、あまりに悪辣なので彼にまつわる記憶は驚異に包まれている、あの老人モーブラです。(…)
分家にはユベール・ド・モーブラしか残っていませんでした。彼はマルタ騎士団に属していたので騎士と呼ばれていて、従兄達とは対照的に善良でした。⁽³⁾

「殺し屋」と呼ばれ恐れられている本家と「頭割り」という騎士的な通称を持った評判の良い分家——この両極端な構図は、トリスタン・ド・モーブラの孫であるベルナルとユベール・ド・モーブラの一人娘エドメの人物像にもそのまま当てはめられる。モーブラの本家と分家が同族でありながらも性質上相容れないように、無教養で粗野なベルナルと洗練されたエドメの間では、既に出会いの場面から、知識、志向、習慣および価値観における差異のみ語り手によって強調されている。だが指摘しておかなければならないが、そもそもサンド小説では、男女間の性質にこのような格差が認められる限り、主人公は結婚しないのが基本である。『モーブラ』は、まず2人の精神的な溝を埋めること、すなわちベルナルがエドメと釣り合う

教育を受け、高い教養を身につけることを、愛する女性に主人公が受け入れられるための大前提として演出するわけである。

このような精神と教養面における格差が、恋愛を経て結婚するはずの男女に設けられているのは、『モーブラ』以後のサンド小説にあっては極めて珍しい。ここで1840年代のジョルジュ・サンドの社会主義小説群に目を転じると、結婚を望む男女間の精神的なつながりは当然あるべきものとして扱われており、主人公の結婚の障害となるものはすべて、階級、財産、ならびに釣り合いを重視する父親の反対に限られるという作品の傾向を確認することができる⁽⁴⁾。たとえば『フランス遍歴の仲間』(1840年)の木工職人ピエール・ユグナンと伯爵令嬢イーズ・ド・ヴィルプルーの間には、階級の差はあれども共通する精神と知識という自然に惹かれあう条件が備わっているし、『アンジボーの粉挽き』(1845年)と『アントワヌ氏の罪』(1845年)においても同様の描写が見られる。

ところが『モーブラ』では、教養と品位において当初は何の共通点も見られないベルナールとエドメの結婚が、父親によって阻まれるどころか、むしろ強く望まれるのである。小説の展開における『モーブラ』のこのような特異性は、『モーブラ』が「異階級同士の結婚 (mésalliance)」を主題としたサンドの他小説と異なり、ベルナールとエドメを等しい階級(貴族)に置きながら、なおかつ彼らを同族にするというサンド小説の中では稀な人物設定を行っている点によって説明がつくだろう。エドメの父親が野生児のようなベルナールに好意的なのは、偏に、主人公が同じ家名を持つ人間だからだ。『モーブラ』では、父親の抱く家名と財産への野心が、主人公の結婚に対する奨励という形で先に述べた社会主義小説群よりも単に穏やかに表現されているだけに過ぎない。エドメの父ユベール・ド・モーブラもまた、他のサンド小説に現れる父親の例に漏れず、結婚問題をめぐって主人公たちに葛藤を生じさせる大きな要因となっているのである。エドメが神父に向かって「父は自分の家名と家系を直接継承させることのできる取り決めには、喜んで同意するでしょう」⁽⁵⁾と語る場面を念頭に置いて読み進めば、小説の最後には教養豊かで立派な青年となったベルナールを前にエドメの秘められてきた愛情が明かされるものの、やはり一族の最後の後継者であるベルナールとの結婚を、分家の娘が父親に対する

「義務」として受け入れようとしているのではないか、との解釈さえも可能になってくる。ユベール・ド・モープラの「家」への執心、延いてはベルナールへの期待がどれほどのものか、具体例としてユベールの次の言葉を挙げたい。

「ベルナール、わたしたちは2人とも残忍な一家の犠牲者なのだ。(…) おまえは自分の地位にふさわしい教育を受け、家の名誉をもう一度高めるだろう、そう望むね？ わたしは望んでいる。お前の信頼を得るためならお前の前にひれ伏して、それを勝ち取ろう。神がお前をわたしの息子になるべく運命付けてくれたのだから。ああ、かつてわたしはもっと完全な養子縁組を夢見ていた。もしわたしが二度目に試みたとき、彼ら（本家の人々）がお前をわたしの愛情に委ねてくれていたら、お前はわたしの娘と一緒に育ち、きっと娘の夫になっていたことだろう。⁽⁶⁾」

下線を付した箇所が明らかにするように、息子を持たない分家の主は、過去に二度従兄トリスタン・ド・モープラの長男に息子が生まれたときとそのベルナールが両親を失ったとき——ベルナールを養子に望み、トリスタンに申し出たのである。だが、分家の相続人を自分の息子たちだけに止めておくことを狙ったトリスタンによって、養子縁組の話は徹底的に邪魔され、7歳のベルナールがトリスタンに引き取られた時点で、自身の教育の下で後継ぎを育てたいというユベールの願いは潰えてしまう。ここで改めて、無知で粗野なベルナールの人格が、横暴な祖父に野放しに育てられ、盗賊のような生活を強いられていた結果生まれたものであることが強調されるわけだが、それでも、本家の崩壊とともに叶ったベルナールとの共同生活が、ユベール・ド・モープラの野心を再燃させているかのように見える。ベルナールが分家に連れてこられた際、既にエドメには婚約者ド・ラ・マルシュが用意されていたが、下線部の最後の一文が物語るように、エドメの父にとってその婚約者はあくまで、あきらめることを余儀なくされていた「正当な跡継ぎ」の身替りであったに過ぎない。事実、ユベールの当初の希望より時期は遥かに遅れたものの、ベルナールはその後、エドメの夫になるべく新たな父親の下で教育を開始するのである。

こうして主人公の父親代わりとなる2人の人物(トリスタンとユベール)に焦点を合わせて読み解いていくと、やがて『モーブラ』において主人公の‘父親的な存在’が担う役割の大きさに気付く。『モーブラ』の文学解釈を新たにしたミシェル・エッケが「モーブラ家」の家系の仕組みに触れ、「モーブラ一族の場合、尊重するのは男系の繋がりのみである」⁽⁷⁾と指摘するとおり、殊に「モーブラ家」は、‘男性的な権力’によって支配されている。興味深いことに、この一族の女性構成員はエドメただ一人であって、そもそも「モーブラ家」自体が、完全な男系で成り立っているのである。

ではなぜ『モーブラ』は、一族から女性を排除するかの如く、わざわざ偏った家族構成をとったのか。父権の強い集団の中では、子の結婚はおのずと「家」の事情に左右されやすくなるものだが、無論、作者はこのことを十分に考慮したうえで「モーブラ家」を創り上げたに違いない。この問いの解答を見出すために、次章ではモーブラ一族の唯一の女性であるエドメの人物像と、小説の表舞台から遠ざけられた主人公の「母親」に重点を置いて論じてみることにしよう。

2. 理想の女性と母親

主人公ベルナルとエドメには、母親が居ない。彼らの母親が同じ病(腸閉塞)で命を落としたことは、ベルナルが冒頭で「モーブラ家」の家系を辿る際に語られるが、さらに小説の最後には、実は2人の母親はベルナルの叔父の一人ジャン・ド・モーブラによって毒殺されていたことが判明する。彼女たちが始末された原因は分家の莫大な財産の相続問題に在ったようだ。ここで注目されるのは、「家」の揉め事によって殺害されたのは財産の所有者であるユベール・ド・モーブラ自身ではなく、彼の妻と、彼が養子にと望んだ子の母親であったことである。一族の男たちの争いによって女たちに被害が及んだ結果、「モーブラ家」の最後の女性として残ったのがエドメであったわけだが、彼女の命さえもトリスタンの息子たちに狙われていたことが、小説の最後に語り手によって明かされている。モーブラ兄弟によるこのような一連の殺害行為に加え、トリスタンの息子たちが、ベルナルの父親を除いて皆独身を通すことによって、「モーブラ家」は女性構成員を失っていくの

である。

ベルナールの母も、エドメの母も、語り手を通してしばしば回想されるものの、まるで「モーブラ家」の家系図から消去されたかのように、彼女たちは名前すら持たない。トリスタンの8人の息子たち、すなわちベルナールの叔父たちの名前がすべて入念に付与されている点を鑑みると、「家」という観点から見たベルナールの母とエドメの母の位置づけの低さが再確認される。

ところが面白いことに、「家」の中では抹消された「母親」が、主人公と女主人公の関係においては奇妙なほどの存在感を放つのだ。たとえば、ベルナールとエドメの結婚を「予言する」田舎の哲学者パシアンスは、素晴らしい気質をもっていた2人の母親に対する賛美から、エドメがベルナールの妻となることを奨励するほどに、亡き母の存在を重視している。ベルナールの母を評価していたユベール・ド・モーブラ同様、母親の心の正しさがベルナールにも受け継がれていることを期待するパシアンスは、エドメと結婚するよう、ベルナールを次のように鼓舞するのである。

「(…) わしはおまえに言いたい、エドメから愛されて、あの子の夫になるんだ
(…) わしはあの子が万人を照らす月のように善良だからこそ好きなのだ。あの子は自分が持っているものを全部与えてしまうような娘で、宝石は何一つ身につけたりしない。(…) あの子の母親も同じだった。わしはちょうど今のあの子と同じくらいの若い頃の母親を知っていたから。それに、おまえのお母さんのことも。慈悲深くて、正しい女主人だった。おまえはお母さんに似ているそうじゃないか。⁽⁸⁾」

ここで認められるのは、善良であった母親と主人公の類似ばかりではない。主人公たちを根本的に結び付けるものが、父方の血の繋がりよりも、むしろ「モーブラ家」から距離の置かれた2人の母親の気質に在ることが強調される。「母親」という登場人物は、モーブラ兄弟によって小説の中心部から早々に追い払われているものの、このようにして陰ながら、主人公の結婚を後押しする働きを持っているのである。

主人公の死んだ母への追慕の念は強く、彼がエドメから母親を連想する場面の頻度も高い。エドメを通して、既にこの世に居ない母親が蘇るかのごとく、エドメと母の近似性が語り手によって繰り返し謳われている。本家の館で捕らわれの身となったエドメがベルナールの頬に接吻した際、「これはなぜだか分からないが、母の最後の接吻をわたしに思い出させた」⁽⁹⁾と語り手が告白する場面は象徴的だろう。さらに、母親が主人公に及ぼす影響力の大きさは、ベルナールが語り始める自分史の冒頭からも窺える。

「(…) 母だけはわたしを説き伏せることが出来ました。そして、よく考えもせずに——というのも、わたしの知性は発達が遅れていましたから——磁気的な必然性が何かに服従するように、わたしは母に服従していました。この、わたしが覚えている唯一の支配力と、その後わたしが受けたもうひとりの女性の支配力に、わたしの成功の鍵があったのです。⁽¹⁰⁾」

‘支配’と‘服従’という言葉が主人公たちの関係のすべてを物語るとおり、ベルナールは自身の母と同等の支配力を認めたエドメに対して一貫して従順である。けれども、2人の間に在るこのような母子関係ないし主従関係こそが、彼らの結婚の実現を難しくしているように思われる。ベルナールが小説半ばでアメリカの独立戦争に従軍し、分家から離れるきっかけも、実のところ、‘冷たい母親’を演じきるかのように主人公を突き放すエドメの態度に在るのだ。数年後2人が再会する場面においても依然として、ベルナールはエドメの中に「母親」を見ている。実際、立派な将校となって戻ってきたベルナールを手厚くもてなしたエドメについて、「エドメはわたしにとって、本物の母親でした。気さくで、心のこもった親切は、あまりに神聖なものであったので、わたしは一日中、彼女のそばでは自分が本当の息子だったら考えたであろうこと以外は考えられませんでした」⁽¹¹⁾と語り手は述懐している。主人公にとって、エドメの中にある「母親」のイメージは根強く、延いては先に述べた彼らの間の母子関係も崩れがたいものなのである。

アメリカ独立戦争から復員した後も、主人公の結婚話はなかなか進展を見せない。

エドメの父に切望され、2 人の間に在った教養と品性における溝も既に埋められているにも拘らず、である。先に述べたとおり、母と息子のような、ある意味歪な彼らの関係が、可能な結婚を不可能にしている印象を受ける。結局のところ、エドメはベルナールとの関係において、「母親」としての役割を捨て去ることが出来ないのだ。視点を変えれば、エドメはベルナールによって、「母親的な存在」のままで居ることを強いられているとも云えよう。まるで一族の男たちによって消された「母親」の穴埋めをするかの如く、エドメは「妻」として、「母親」として、二重の役目を背負っているのである。

女主人公が「母親」としての役割から降りるためには、主人公に対して秘め続けてきた恋愛感情を打ち明けなければならないのだが、興味深いことに、そのような極めて私的な告白が、『モーブラ』では法廷という公の場で、傍聴席に並ぶ「群衆」の前で、成されている。ベルナールが無実の罪で捕らえられ、公判を受けることになる過程の説明は次章に先送りすることにして、ここで強調したいのは、主人公たちの奇妙な関係が、いわば公に晒され、裁かれることによってこそ解消されることである。

パリの社交界に出入りするようになると、彼らの結婚問題は「家」の枠組みから外れ、主人公の属する「貴族社会」の中で語られる。このような特定の社会集団は、先に触れた「群衆」同様、主人公を取り巻く「世間」の範疇に入れることも可能だろう。ここから新たに、『モーブラ』における「貴族社会」と「群衆」の働きに注目し、「家」の外の視点から、つまり「世間」の側から、「家」と「結婚」の関係を検討していくことは重要であるに違いない。

3. 世間からの追放

主人公と「貴族社会」との接触は、小説の半ば、舞台が地方の田舎サント・セヴェールからパリの社交界へと一時的に移された時点から起こる。それまで「家」の中とその周辺に収まっていた主人公の活動範囲が、ここから一挙に広がるとともに、小説内部に「名前もなければ顔も見えない」多くの社交界人たちの声が導入されることになるのである。パリの社交界という新たな舞台装置の中で、ベルナールとエ

ドメの結婚は、もはや「モーブラ家」の問題だけに留まらず、おのずと世間で囁かれ始める。つまり主人公たちは、社交界における噂という、外部からの刺激を頻繁に受けるようになるのだ。語り手は、世間が一地方貴族の結婚について殊更騒ぎ立てる要因として、まず社交界におけるエドメの華々しい成功を挙げているが、財産のある一人娘の結婚を、没落した旧家の息子を救済する手段として貴婦人たちが重宝していたという事実も補足している。多くの貴族たちがエドメに求婚し、彼らが次々と断られていくにしたがって、彼女の結婚はますます、社交界の注目を集めるのである。このような社交界における噂の連鎖反応を、語り手は次のように説明している。

社交界では、エドメはたしかに、ド・ラ・マルシュと結婚の約束をしていると言われていました。しかし、その結婚がなぜ果てしなく遅れているのか、わたし以上に分かっている者は居ませんでした。人々はついに、彼女が彼を厄介払いする口実を探しているのだと言うようになりましたが、彼を嫌いになった原因は、わたしのことを熱烈に想うようになったからだろうと推測することしかできませんでした。(…)しかし、ド・ラ・マルシュとわたしがエドメの前に居るのを見るやいなや、わたしたちの態度が冷静で自然なので、すべての推論は無に帰してしまうのでした。⁽¹²⁾

この段階では、世間の噂は事実を掠めてもいないかのようだが、実は概ね、噂はエドメの内面を探り当てつつあったのだ。小説の最後に成されるエドメ自身の証言によれば、下線を付した箇所語り手が社交界の声を取り入れながら既に示唆しているように、彼女はベルナルを愛しており、ド・ラ・マルシュとの婚約の解消を密かに望んでいたのである。だがその後、世間はエドメの結婚に関して、正確な事実を捉える機会を見失ってしまう。ベルナルのアメリカ出征中、エドメに拒絶され、復讐心に燃えた貴族の一青年が、エドメが本家の館ロッシュ・モーブラまで誘拐されたという話を聞きつけ、それに脚色し、彼女が山賊たちの犠牲になったという噂をまことしやかに流したからである。

逆恨みによって真相を捻じ曲げられた誘拐事件は、エドメにとって「消えることのない汚点」⁽¹³⁾となり、取り巻き連中は皆、蜘蛛の子を散らすように彼女の元を去っていく。悪質な噂が、エドメを容赦なくパリの社交界から追放するのである。噂が撒かれた後、世間から孤立するのはエドメだけではない、父親であるユベール・ド・モーブラも娘とともに田舎に引きこもる。社交界との繋がりを絶ったという意味では、独立戦争に参加したベルナールも同じだろう。それから6年後、アメリカから戻ったベルナールに対し、老衰したユベールは「わたしたちは世間で耐え難い立場に置かれている。わたしは娘の名誉が回復するのを見ないうちには、墓場に入りたくない」⁽¹⁴⁾と訴えるが、やがて、「モーブラ家」に事件が起きる。狩の途中にエドメが撃たれ、その容疑者としてベルナールが捕らえられるのだ。

エドメ殺害未遂事件の公判の場面では、法廷を訪れた「群衆」という、名もない多数の登場人物が新たに投入される。庶民然り、貴族然り、あらゆる社会集団を内包したこの「群衆」の出現が、判決の行方に少なからず影響を与えるとともに、法廷の場面の劇的要素をも色濃くしている。ここで、裁判の一場面を引用してみよう。

公判の日がやって来ました。わたしは穏やかな心持ちで出かけましたが、群衆を見ると深い悲しみに襲われました。法廷には、支援してくれる人も、共感してくれる人も、皆無でした。(…) 誰の顔にも、むきだしで厚かましい好奇心しか見られなかったのです。平民の若い娘たちは、わたしが格好いいとか、若いとかとわたしの耳元で叫びました。貴族階級や財界の多くのご婦人方は、傍聴席で祝宴のときのようにきらびやかな装いをひけらかしていました。(…) 多くのカプチン会修道士たちの列からは、山賊だの、不信心者だの、凶暴な獣だのという呼び名が聞こえてきていました。⁽¹⁵⁾

「群衆」は、次々と現れる新証人の発言に素直に反応し、その都度効果的な野次を飛ばしている。だが、法廷の中で彼らに付与された役割はそこまでのようだ。無責任で気まぐれな「群衆」には、物事を公正に捉え、真実を見抜く力はない。彼らはあくまで、法廷の傍観者に過ぎないのである。

公判は長引くものの、エドメの出廷とパシアンズの演説がベルナルルの無実を証明し、やがて彼は釈放される。法廷の場で描かれるエドメの姿は注目に値するだろう。彼女は「群衆」の前で、裁判長をはじめとする法廷人たちの偏った取調べを非難しながら、ベルナルルへの愛を堂々と告白している。「みなさん（裁判長をはじめとする法廷人たち）はわたしの最も内面的な感情に対して説明を求めています。わたしの心の神秘的な部分にまで降りていって、わたしの羞恥心を苦しめ、神のものでしかない権利を横取りしています。わたしの行動に関してあなた方が不可解だと感じていること（…）はすべて、たった一つの言葉で説明されます。わたしは彼（ベルナルル）を愛しているのです」⁽¹⁶⁾裁判所の役人たちと「群衆」は、エドメがベルナルルを疎んじていたために、彼が思い余ってエドメの殺害を企てたのだと断定していたが、エドメのこの最後の一言によって、第三者の思い込みは覆される。真犯人として捕らえられるのは、2人の「モーブラ」、ジャンとアントワヌだ。小説のはじめに、ベルナルルの8人の叔父のうち、6人は憲兵隊との戦闘で命を落とし、ジャンとアントワヌだけが生き延びていたわけだが、エドメ殺害未遂の件で前者は共犯の罪で修道会に監禁され、後者は処刑される。こうして、8人の「殺し屋」「モーブラ」は、社会からの罰を受ける形で小説から姿を消すのである。

したがって残るベルナルルとエドメとユベールが、最後の「モーブラ」となる。その他の「モーブラ」のように、彼らが社会から「死」を強いられることはないが、それでも、社交界からの追放に加え、冤罪で捕らえられ、法廷で裁かれ、また出廷を余儀なくされるといった3人の身に降りかかる一連の負の出来事を想起すれば、彼らもまた、「殺し屋」と呼ばれたモーブラ一族の一員としての「罰」を等しく負わされているのではないかと推察できる。本家の息子と分家の娘の結婚は、「モーブラ家」が代々行ってきた盗みと人殺しという大罪を彼らが社会に裁かれ、それを償った結果成し遂げられるのだと言えよう。社会に対する埋め合わせを社会における「モーブラ家」の名誉の回復に置き換えるかのように、ベルナルルとエドメは、父ユベールの眠る墓前で「（…）ユベール・ド・モーブラの名と同様に尊敬に値し、尊ばれる名を残すよう、絶えず努めることを誓う」⁽¹⁷⁾のである。

おわりに

ここで、「モーブラ家」が女性構成員を極端に欠いている所以を改めて問い直せば、「男性的な権力」の強い「家」を主人公の背景に据えることによって、作者はあえて、社会の最小単位である「家」の束縛を主人公に最大限に課そうとしたのではないか、という結論に行き着く。実際、父権の及ぼす力の大きい「家」に囚われた主人公は、作者の張り巡らした社会的な束縛の網を、鮮やかに潜り抜けることは出来ずにいる。『モーブラ』執筆当事、夫へ別居の申し立てをしたばかりの作者は、小説の序文で「結婚」と「社会」について、次のような考えを述べている。

結婚の絆を絶たなければならないことがどれほどつらく、苦しいことであるかを理解するようになると、ますます、結婚に欠けているものは現在の社会が追い求めることが出来ない崇高な幸福や公正さの諸要素であると感じるようになってきた。それなのに社会は、この神聖な制度を物質的利害による契約とみなし、その価値を貶めようとしている。社会はそのしきたり、先入観、偽善的な懐疑心によって、あらゆる方面から一斉に結婚制度を傷めつけているのだ。⁽¹⁸⁾

結婚したものの、それを解消しようとしている作者と、小説の中で愛する女性との結婚を願う主人公の姿を、直接照らし合わせることはできないが、実体験を通して感じ取っていた結婚制度の中の社会の不正と見なし得るもの——たとえば父権および夫権、持参金の問題など——を、作者は『モーブラ』の主人公に曰く因縁つきの「家」を背負わせることによって、小説に投影させているかのように思われる。これまで辿ってきたとおり、「結婚」という制度が家名や財産を追求する「家」の利害によって左右され、さらには「家」と「家」の取引としてしばしば歪められる様を、『モーブラ』は詳細に表しているのである。

しかしながら、小説の基本的な構造とは相反するかのようには、作者自身は「ここは社会における結婚制度の歪みを実証する場ではない。『モーブラ』はそのような関心で重苦しくなってはいない」⁽¹⁹⁾と、序文で事前に断っているのだ。確かに、作者は小説の最後に、結婚制度を阻害する社会の現実を、「神聖な結婚」という形で

理想的な結末へとすり替えてはいる。このような点を考慮に入れば、『モーブラ』の中で実際の社会の在り方と小説とを切り離そうと試み、「一途で永遠に続くような愛」⁽²⁰⁾を純粋に描こうとした作者の思惑も一定の理解を得られるだろう。

小説の結末で描写されるフランス革命は、歴史上、大半の貴族にとっての悲劇であったが、逆に『モーブラ』の中では、庶民の側に立つ主人公によって支持されている。したがって語り手が強調するように、主人公の結婚生活の幸福が、この歴史的大事件によって乱されることは決してない。むしろ、この革命が、ベルナールとエドメを封建的な「家」から解き放つのである。フランス革命の勃発により、一族が培ってきた財産は、共和国の定めに従った主人公によって放棄される。エドメの父ユベールが死に際まで執着し、ベルナールがその遺志を継ぎ守ろうとした貴族としての「モーブラ」は、実質上、ここであっけなく終わりを告げるのだ。フランス革命が庶民に希望を与えるとともに多くのものも破壊したように、革命は「家」に繋ぎとめられてきた主人公を解放すると同時に「モーブラ家」を瓦解させる。「モーブラ家」の物語である『モーブラ』は、こうして、革命によって終わるのである。

『モーブラ』において初めて、結婚前の男女を主人公に据え、彼らが結婚に至るまでに直面する障害——「家」の問題、男女間の教養の差、世間の噂など——を仔細に表したジョルジュ・サンドは、いくつかの例外的な作品を含みながらも、ここから一貫して、結婚を望む主人公たちに社会的な障壁を置き、最後にはそれを克服させる、という小説展開を取るようになる。男女間の社会上の隔たりは、先にも触れたように、階級だったり財産だったりするが、そこから派生する家族間の風俗習慣、宗教、価値観などの違いが、各家族の属する社会グループによって主人公の結婚が阻まれる動機である。ジョルジュ・サンドが描き続けた「結婚」をめぐる家族や社会集団間の確執は、『モーブラ』以降、作者自身が徐々に政治への関心を強めていく中で、一層顕に描出されるようになる。このような流れを経ながら、1840年以降、ジョルジュ・サンドは社会主義小説と目される一連の小説を著し始めるのである。

注

- (1) Arlette Michel, « Structures romanesques et problèmes du mariage d'*Indiana* à *La Comtesse de Rudolstadt* », in *Revue de la Société des Études romantiques*, n°16, 1977, p.38.
- (2) George Sand, *Mauprat*, Garnier-Flammarion, 1969, p.29.
- (3) *Ibid.*, p.35.
- (4) ジョルジュ・サンドの社会主義小説を概観するにあたって、筆者の「1840年代前半のサンド小説における結婚の問題——財産と階級的偏見をめぐって」(人文論究第56巻第2号、2006年)を参照されたい。ここでは、ジョルジュ・サンドの社会主義小説群の中から『フランス遍歴の仲間』、『アンジボーの粉挽き』、『アントワヌ氏の罪』を取り上げ、3小説における家族の在り方と偏見の現れ方、そして結婚が成立する上で重視される家の財産問題を中心に論じている。
- (5) George Sand, *Mauprat*, *op.cit.*, p. 143.
- (6) *Ibid.*, p.99. 丸括弧内の言い替えは論者による。
- (7) Michèle Hecquet, *Mauprat de George Sand*, Presses Universitaires de Lille, 1990, p. 45.
- (8) George Sand, *Mauprat*, *op.cit.*, p.132.
- (9) *Ibid.*, p. 82.
- (10) *Ibid.*, p. 44
- (11) *Ibid.*, p. 206.
- (12) *Ibid.*, p. 169.
- (13) *Ibid.*, p. 209.
- (14) *Ibid.*, p. 220.
- (15) *Ibid.*, p. 270.
- (16) *Ibid.*, p. 298. 丸括弧内の言い替えは論者による。
- (17) *Ibid.*, p. 311.
- (18) *Ibid.*, p. 29.
- (19) *Ibid.*, p. 29.
- (20) *Ibid.*, p. 29.

(文学研究科研究員)